

# 政治経済学I

## —5. 労働と生産—

### 5.1 労働過程

生物は一般に外界に働きかけてそれを変形し、変形した外界を享受することによって生を営む。このような生物と外界との関わり合い全体を物質代謝metabolismと呼ぶ。人間も生物である限り、物質代謝を行うことに変わりはないが、人間の物質代謝には、他の生物とは異なる点がいくつかある。第一に、生物の外界への働きかけは本能に縛られているが、人間には自由に構想を働かせる余地がある。第二に、人間以外の生物は身体の中かの器官を通して外界に働きかけるが、人間は自らの器官だけでなく、媒介（労働手段）を用いることで、多様な働きかけが可能となっている。第三に、人間以外の生物では、外界への働きかけとその摂取が一体となっているが、人間の場合は、働きかけ（労働）と摂取（消費）が分離しており、働きかけた結果が人間の外側に生産物として生み出される。

人間が媒介（労働手段）を用いて外界（労働対象）に働きかける過程を労働過程と呼ぶ。労働過程は以下の3つの要素から成る。

- 労働
- 労働対象
- 労働手段

労働とは、人間の合目的的活動のことである。人間の労働の特徴は、予め目的を構想し、その目的に沿って実行するところにある。人間が労働によって働きかける対象（労働対象）には自然があるが、それ以外にもすでに労働によって加工されたものも労働の対象となる。これは原料と呼ばれる。人間が労働を行なう場合、労働対象に素手で働きかけることは稀であり、労働手段を通じて働きかけることが普通である。道具、機械などがこうした労働手段に当たる。

### 5.2 生産過程

#### 5.2.1 生産とは何か

ある過程の<sup>アウトプット</sup>産出が<sup>インプット</sup>投入を上回るとき、生産的であると言い、このような過程を生産過程と呼ぶ。また、産出から投入が補填されることによって、生産が繰り返されることを再生産と言う。社会的再生産とは、このような再生産が社会的な規模で行なわれることにほかならない。産出から投入の補填分を引き去った残りのことを純生産物と呼ぶ。

このような生産という観点から見れば、労働対象と労働手段はともに生産手段として現われ、労働は生産的労働として現われる。

## 5.2.2 対象化された労働

生産過程の要素は、生産手段と（生産的）労働であるが、生産手段もまた生産物だとすれば、それも生産手段と労働の成果である。この意味で、生産物には、当該の生産過程における労働だけでなく、生産手段を作るために費やされた種々の過去の労働も対象化（投下）されていると言える。生産物に対象化された労働のうち、前者を**生きた労働**、後者を**死んだ労働**（過去の労働）と呼ぶ。生産物から見れば、生きた労働も死んだ労働もともに、生産に必要な労働として無差別に合算される。

では、生産物に対象化された労働量はどのようにして知ることができるのか。

いま、米と鉄の二種類の生産物から成り立っている社会を考える。この社会では、鉄 40 トンと米 10kg と労働 40 時間を投じて鉄 80 トンを、鉄 40 トンと米 20kg と労働 80 時間を投じて米 80kg をそれぞれ生産している。このときの鉄 1 トンと米 1kg に対象化された労働を求めてみよう。

まず、鉄 1 トンに対象化された労働を  $t_1$ 、米 1kg に対象化された労働を  $t_2$  と置く。すると次のような方程式（価値方程式）をつくることができる。

$$40t_1 + 10t_2 + 40 = 80t_1$$

$$40t_1 + 20t_2 + 80 = 80t_2$$

この方程式を解くことによって、鉄 1 トンに対象化された労働は 1.6 時間、米 1kg に対象化された労働は 2.4 時間であることが分かる。

ところで、この社会において再生産が行なわれるためには、生産された鉄のうち 40 トンを鉄の生産手段として、残り 40 トンを米の生産手段として補填に充てる必要がある。また、生産された米のうち 10kg を鉄の生産手段として、残り 20kg を米の生産手段として補填に充てる必要がある。補填の残余である米 50kg がこの社会における純生産物である。

一方、生産的労働を行なう労働者も生存するために生活手段を消費しなければならない。純生産物のうち、米 30kg を消費して労働者は生活するとしよう。このとき、労働者が消費する米 30kg を**必要生産物**、その残りを**剰余生産物**と呼ぶ。